

チリッと掠めたかと思うと
もう涙がポロポロ落ちていた

「これで五人目だ！」

町会長はシバレた大根をサクサク切ると
不機嫌に屋敷の中へと引っ込んだ
太郎は青っ鼻をズルリと吸い上げた

*

温もりを感じていた掌は
千枚通しで貫かれた冷たさを感じた
「あなた どうしたの？——」

ブラウスの袖を伝って鮮血が滴り落ちる
「かまいたち……」

吉野繁造は六人目の犠牲者に登録された

*

町は辻斬りの跋扈ぼっこに怖気立った
娘や妊婦や老人やボディービルダー
までが 無差別に襲撃された
「チーズを供えにやいかん！」
念仏婆はあがシメシメと宣のたまうた
乳飲み子を持つ女房どもは
翌朝から一斗樽分の乳搾りに勤しんだ

*

鮑はチーズを好む
(と言われている……)
しかも人間の母乳から作られた固い奴を――

三十年前にも似た事件が起きていた
当時は乳が豊富にあったから
七日後には

鮠はパンパンに腹を膨らまして退散した
今では乳を出す母^かがあが少なくなったので
正太郎は自分も危ないと感じた
それで急ぎよ美恵子と駆け落ちをした

*

「何であれ命が一番だべえ」
乳絞りの女房の一人が言った
「次男には夜歩きを禁じとる」
五人の子を持つ中村の母^{ちや}が言った
「わしら乳を出す者には害は無えって……」
ドタリと階段を転げる音がした
母乳の出ねえ森口の女将だった

*

金物屋の末娘に被害が及んだ
ザングリと喉元に噛み跡があった
親父はカッカと頭から湯気を出し
「鮠の野郎 鮠の野郎……」
と 無念の呻きを上げた
新任のお巡りは拳を握り奮い立った
沼田の息子が
ひとり茫然と立ち竦^{すく}んでいた

*

その日は――
脳天が凍てつく師走の夕暮れだった
昼には既に村上先生が殺^やられていた
チーズを奉納するのは
もちろん町会長の役目である

しかし

生憎彼は風邪で寝込んでいた

(ひよっとしてズル休み?)

代わりに

孫崎豊君が大役を仰せつかった

念仏婆ばあは微かに眠気を憶えた

風が――

さあつーと渦を巻いた

孫崎君は

大きな嚏くしゃみをひとつした

桜の古木

整形を保たない異端な あなた
この薄桃色な季節のほかに
あなたを

仰ぎ見るものは 誰もいない

一瞬の変成を あなたは

幾百年ものあいだ 反芻してきた
枝垂れること……

言葉による彩りでは 計れない
あなたを あなたは

上へ上へと墮落するものたちへ
腰骨を折り畳んで 祈った

あなた

いま生命の分岐点に予感され
そつと

枕木に手を添える

あなたの その

艶やかさに目を向けられず――

異端である あなたの

あなたは いま

言葉による逃避から身を引き
飴細工の榭しじねに眠る

目に映る隠喩では語れない
あなたを あなたは……

ジャガイモの発掘

アイダホ産まれのジャガイモが
北海道産の男爵に秋波を送った

「何と云っても、皮の厚さだ！」

同型の流行性感冒は

サト芋 薩摩芋の胎内を浸食する

*維管束いかんそくと形成層の貝合わせ

*地下茎の羽状複葉うじょうふくようへの嗜虐行為

*はたまたソラニン毒素の窃視症……

語り難き皮膚間隔の 言語感覚

書割りに籠城する

培養不能な 雌雄嵌合体かんごうたい

「晚餐は山芋の千切りにフライドポテトで
いかがでしょうか？」

「いやいや、ポテトはいかんでしよう！」

(……ここで、拍手)

様式の水栽培と

改良新種の逆輸入(肥料は鶏糞に限る)

種芋が 本質か？

萌芽茎ほうがけいが 始まりか？……

夥しい書籍の遺跡から発掘された
解読不能な ッニッポン語

中から一枚の葉が発見されました

〃既成の枠にとらわれない、真に新鮮な

ジャガイモの登場を期待しています〃

満天に散らばる 大小様々な陥穽

湖面に照射する滑らかな かつ 重々しい光沢

キリキリ キリキリ と軋む 硝子板の破片

時折 波紋の求心点から響く 魚鱗の擦過音

*

姉は せつせつせつと 薪を継ぎ足す

私は その目を盗みながら こんもりとした焚火に近寄ろうとする

「いけません いけません。母が居ないんだから……」

「だけど、お兄さんはいいと云ったではありませんか」

「だったら お兄さんに頼んでみなさい！」

それつきり 姉はブリキのバケツを置き去りにして家の中へ入る
私は誰かブリキの縁で
指でも切ったら大変だろうと心細くなる

*

ハア ハア 吐く息の湿り具合が心地好い

しかし 時間が経つと 部屋中を包む水蒸気で息苦しい

硝子戸の表面を ツーツと走る大量の雨

しかしこれも 時間が経つに連れピリピリになる

そう思つて 硝子戸を開けようとする

硝子戸は硝子戸ではなくて プラスチックで出来た俎だった

何だか馬鹿馬鹿しくなったので 俎を片付けた

*

大きなダンボール箱の中には

羊を包んであつたぼろ切れが一杯詰まっていた

それが簞笥の上で今にも落ちそうに安定しない

「誰がこんな所に置いたんだ」
と私は腹が立ったが、何とかそれを手に入れたと思う
しかしやはり姉の目が怖いので
それくらいならもう少し辛抱して見ようと決心した
ダンボール箱は漸く安定した

*

高い高い山かも知れない
上へ行けば行く程寒くなると思ったら
一歩も前へ進まなくなった
「だけど一人で上っているんだから構わない」と納得したら
思ったように 雪が耳の穴の中へ入ってくる
「片方が駄目なら、こっちがある」
と 思ってビニールで顔をすっぽり覆ったら
何だか恥ずかしくなって
コンクリートの壁でマッチを擦った

*

肩から上だけが冷たいので
肩だけを覆うカーデイガンがあればいいと思った

お喋りが過ぎるからって

貴方は

私の泣き腫れた臉を捲^{めく}っては

燃えたぎる火箸を刺しましたね

(なにも櫓^{やぐら}に登って

声高に罵った訳でないのに)

闇さえ煌めく

この、灼熱の時代

過剰はそれほど

罪に値するでしょうか？

*

歩くのが遅いからと云って

貴方は

黴臭い古本の束と一緒に

私を土の中へ埋めました

(手淫に耽る老公爵の嘆きと

血腥臭い刑具にまみれ)

快樂の雫は

謀略と革命の果てに潰^{つぶ}え

刻印された残虐史は

未だに嘘を吐いている

*

貴方は いつか

波間に群がる鳥達の影に怯えて

私の両腕を挽^もぎ取ってしまいました

(分かっていた

筈なのですが)

その日から

小鳥の鳴き声も虚しく

コケティッシュな娘達さえ

透き通る翅を折り畳みました

(言い訳をしたのは

どうしてですか?)

*

一から百まで数えて

それをまた 百回繰り返す

(ふふ)

幸運を呼ぶお呪いまじなでしようか?)

*

あの時

貴方が破れたスカートを脱いで

酔っ払って 地団駄を踏まなければ

いまごろ私は

この白い闇に

切断されずに済んだことでしょう

(翼を持たない

軍楽の霊——)

確かに伽藍は蒼窮に映えるもので

色彩は

網膜の遊蕩に置き去りにされて

*

昨夜

眼球の底に染みを見付けました

瞬きをすると

それが1cmほど右に移動します

(ああ

また喋り過ぎてしまいましたね

*

闇は冷たいと知っていたながらも
こう眩しくは――

* 掲載誌一覧 *

卵屋のじっちやの幽霊屋敷	『幻想卵』 38号 1992年3月14日
発散の起源	『詩学』 2004年1月号
鎌鼬	『詩学』 1998年10月号
ジャガイモの発掘	『詩と思想』 1998年8月号
修道院の煉瓦塀	『幻想卵』 42号 1993年8月7日
街	『現代詩手帖』 1995年4月号
冷たい残像	『現代詩手帖』 1995年2月号
カルト	『現代詩手帖』 1998年7月号
詩人の肉体	『詩学』 1998年11月号
再会	『幻想卵』 51号 1996年6月9日
顕在夢	『幻想卵』 51号 1996年6月9日

『詩学』『詩と思想』『現代詩手帖』は、いずれも投稿欄での掲載。
その他『幻想卵』には本書所収の原詩（大幅に改定）の一部が掲載されているものがある。

藪下明博 Yabushita Akhiro

一九六二年、北海道函館市生まれ。建築家。

『幻想文学』に書評・エッセーを発表。

『幻想卵』後期に参加。

■原詩の掲載を快諾してくださった川端隆之氏に感謝する。

また、葉を書いてくれた石堂藍氏にはひとかたならぬお世話になった。
記して謝意を表したい。

卵屋のドッチャの幽霊屋敷

二〇二二年五月二五日初版第一刷印刷

二〇二二年五月三二日初版第一刷発行

著者 藪下明博

発行者 川島徳絵

発行者 株式会社アトリエオーシーティーエー

北杜市長坂町大八田四一九六・七七

電話 〇五五一(三三二)六五四〇

<http://www.atelierocta.com/>

印刷 石川特急特殊製本株式会社

ISBN978-4-900757-21-9

©Yabushita Akhiro